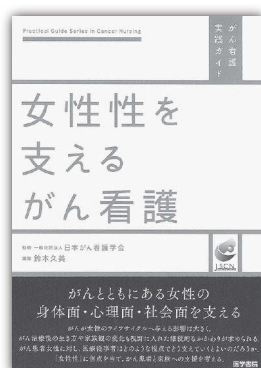


この本、いかがですか？

女性がん患者のリアルが 詰まっている



《がん看護実践ガイド》 女性性を支えるがん看護

一般社団法人日本がん看護学会 監修

鈴木久美 編集

本体 3400 円＋税

B5判／医学書院／2015 年

評者

阿南里恵

特定非営利活動法人

日本がん・生殖医療学会理事

現代の日本人女性は仕事や育児、介護など、それぞれにおいて大きな問題を抱えながら生きています。それらは一見、個別の問題のように扱われますが、実際には複雑に絡み合っていてなかなか抜け出せないのが現状です。例えば育児をしながら働いている女性は、子どもが成長するまで時間的、体力的に余裕がありません。さらに、そこへ突然自身のがんという重大な出来事が起こってしまったらどうすればいいのでしょうか。本書では、そのような複雑な問題についても取り上げており、がん経験者の立場からすると「まさにそれこそが現実！」と強く共感しました。

私は 23 歳の時に子宮頸がんによって子宮を

失い、その後治療による後遺症を抱えました。これまでの 12 年間を振り返ってみて気づいたことは、年齢とともに悩みが変化していったということでした。おしゃれが大好きだった 20 代半ばまではお腹の傷を見られることが嫌で旅行に行けませんでしたし、20 代後半からは出産できないために恋愛や結婚に戸惑いました。そして 30 代後半に差し掛かろうとしている現在は、早発閉経に備えて検査を受けている状況です。つまり、1 人のがん患者であっても年月とともに社会や家庭での役割、また自分のありたい姿は変化します。だからこそ、がんが完治してもその後の長期にわたるサポートが必要となります。

また、患者本人がしっかりと向き合うべき問題もあります。第 2 章では「妊孕性温存と倫理」について解説されています。日本では技術的には妊娠・出産の可能性を残すことができたとしても、それに対する倫理的課題の解決や法整備が追いついていません。患者本人がその問題に直面した場合、なんとか自分の希望を実現しようとばかり考えがちです。しかし、その問題が自分に何を問うているのかをしっかりと理解し、向き合うことでやっとリスクが見えてきます。実際に私は以前まで代理懐胎をととても安易に考えていました。それは自身に出産の経験がないからです。しかし、主治医から出産することは健康な女性にとっても非常にリスクが大きいことを教えてもらい、その問題の本質を理解することができたのです。

本書では答えや支援策が明確になっていないそのような問題についても記されていることが素晴らしいと思います。医師や看護師だけでなく、患者さんご本人、ご家族、お友達、職場の方など、女性のがん患者さんと接する機会のあるすべての人たちに読んでほしい 1 冊です。①